

## ／断章

大学のクラブ棟の一角。旧時代の名残の濃い鉄筋コンクリート建築が、三階建ての体をちぢこめるように、ひっそりと佇んで<sup>たたず</sup>いる。耐用年数をとうの昔に数え終えているその建物は、大学側がほとんど管理を放棄しているために荒涼としており、部費の少ない弱小サークル、幽霊サークル、非公認サークルといった連中が細ぼそと肩を寄せ合っている。

塗装がはがれ、所々ひび割れの目立つ旧建築の一階、その奥の隅っこ袋小路。ともすればその建物に入居する他サークルの者でさえ存在を知らない、忘れ去られたような一角がある。埃のにおい色濃く、窓が西側にしかない、そんな場所に秘封倶楽部の部室がある。ただし、部室と呼ぶのは正確ではない……そこは本来単なる空き部屋で、秘封倶楽部はそれを無断占拠しているのだ。

何をしているの、とメリーは訊いた。部屋我真ん中に

はアンティークの電気ストーヴが置かれ、あかあかとした光と熱を投げかけている。四畳半ほどの小さな部屋はそのおかげで京都の底冷えする冬を逃れている。メリーは今来た風で入り口側に立っていて、蓮子は妙に真新しい会議用机に向かってノートを広げている。勉強？単位やばいの？とメリーが訊くと、蓮子は首を振る。首を振りながら、単位はやばいけどね、と云う。

「小説を書いているの」

メリーは蓮子の差し向かいに、パイプ椅子をがたがた引いて腰かけ「小説？」と訊き返す。そうしてマフラーを解き、外気にさらされてすっかり冷えた指を祈るように丸め、「さむ」とほそくつぶやく。

「そう、小説、ノヴェル」蓮子はペンを指で器用に回して見せる。

「へえ、どんなの？私好きよ、小説、ミステリとか」

「私はSFとかが好きかなあ」

「SFって……蓮子はレトロねえ」

「メリーもそれほど負けてないけれど。そうよねえ、ミ

ステリイもSFも、科学の進んでない頃の方がよっぽど面白いものね……科学はミステリイから謎を駆逐したし、もうSFの題材にするほど科学にロマンはないし」

「じゃあ、蓮子の小説はそのどちらでもない？」

「ふふ。何を隠そう、私たち秘封倶楽部を主人公にした冒険活劇よ！」

メリーは両手で顔を包むようにして、頬杖をつく。体重移動につれて、パイプ椅子がギツと軋る。<sup>き</sup>「へーえ。私小説っていうの？　そういうのって」

「どうしようかしら。私を……宇佐見蓮子を語り手にするのなら、私小説って言っても間違いないのかしら？」

「えっ、つまり、蓮子が私、メリーになりきって一人称小説を書くっていうこと？」

「実は、そこが悩みどころなの」

蓮子は口をとがらせて、さっきまで回していたペンを唇の上に乗せる。そうして、メリーがそのペンを面白がって奪いに來たのに気づき、ペンを手元に落とす。メリ

ーはちょっと残念そうに舌を出す。

「そもそも、なんで小説なんて書くこうしてるの」

「なんか、日々の倶楽部の活動録、みたいなのを書くうと思っただけと」

「蓮子にしてはマメな心がけね」<sup>ジ</sup>

「メリーの中のその宇佐見蓮子像は今すぐ改めるべきだわ……。で、実際書いてみたんだけど、これが無味乾燥で面白くないったら」

「ねえ、記録なんだから別に面白くなくてもいいんじゃないの？」

「ばかメリー！」

蓮子は椅子を蹴ってガタリと立ち上がる。リノリウムの床が若干へこんだのではないか、とメリーは思う。

「私たちはすることなすこと面白おかしくなくちゃダメじゃない。何のための秘封倶楽部なの、何のために結果あばきなんて危険なことやってるの、メリーのその気持ち悪い目は何のためについているの、ええい気持ち悪い節穴か！」

「……理由とか、考えたことなかったかな」

メリーが長い金髪をくるくるといじりながら言って、蓮子は毒気を抜かれたように黙ると、パイプ椅子にずんと腰を落とす。

「それで、悩みどころって？」

メリーの言葉を聞いて、蓮子はうあー、という謎めいたうめきを発しながら仰け反る。その体重を一身に受けたパイプ椅子の背もたれがギギギと泣く。白い首筋が蛍光灯にあらわに照らされて、なまめかしく蠢く。

「私たちの小説を書くとすればね……メリーが主人公の方が絶対面白いの。だって、メリーは境界を越える目を持つてる。物語が動くってというのは、変化すること、つまり、境界を越えることとほぼ同意。……往きて帰りし、なんて言葉があるくらいだしね。ほら、メリーほど主人公にうってつけな人物はいないわ」

蓮子は一呼吸おいて、仰け反った首をかくんと元に戻す。蓮子と同じ目の高さで、メリーは黙って聞いている。「でもね、メリーの一人称って……よく考えたんだだけ

ど、ものすごく難しいのよ。だって、境界っていうのは、私たちからみれば不思議なものだけど、メリーにとっては日常茶飯に目にするものでしょう。そう……メリーの視点っていうのは、境界を発見する目であると同時に、境界の境目を失わせる……一緒にたにしちゃう目でもあるのよ。それじゃあ、不思議を不思議として描けない。犯人が最初から分かっているミステリイみたいなものだよ」

メリーは、頬杖にやわらかな頬を沈みこませて、ほうと息を吐く。「あら、でも最初から犯人がわかってる、っていうジャンルがミステリイにもあるわ……ほら、倒叙ものってやつ……」

「例えば、例えば」

再び口をとがらせる蓮子に、メリーは笑いかける。

「じゃあ、大人しく蓮子を主人公にすればいいじゃない……私は、蓮子こそ主人公にふさわしいと思うけど。だって、蓮子には、私と違って、冒険に自ら進む意志があるわ。それって、何よりも大切な主人公の資格なんじゃ

ないかしら。私じゃあ、せいぜい狂言回しがいいところだわ」

メリーが笑いながら言って、蓮子はうーむ、とうなる。そうして、机と同じく妙に真新しいホワイトボード、隅のラックに詰め込んだある古新聞の束、有象無象のガラクタを積み上げた一角……と、視点を部屋中にぐるぐると巡らせる。そうして、電気ストーヴがさつきに増して赤いのに気づき、西側の窓から夕日が差しつつあるのを知る。

「ぜったいメリーが主人公の方が面白いんだけどなあ、上手くやれば」

「それで、今書いてるのはどんな感じなの？」

メリーがノートをつまみ上げようとすると、蓮子の手がそれをいち早く奪い去った。

「まだ秘密」

「えー、けち。……それとも、恥ずかしいだけなんじゃないの？」

「まさか。読ませない小説なんてちり紙と同じじゃない。

……どうせなら、ある程度出来上がってから読んでもらった方が、読みがいいがあるでしょう」

「そう言って、未完の大作をいつまでも未完にしている人多いわよ……」

「大丈夫よ、完成することも、面白さも保証してあげる………なんたって、題材は私たち秘封倶楽部の活動なんだから。蓮台野のことや、メリーの夢の話や……うん、こんなに素敵な題材がいっぱいなんだから、私の文章がどれだけまずくたって、面白くならないはずがないわー」

蓮子は目を輝かせて力説する。メリーは、柔らかくほほえみながら、期待して、と言う。

ガラスのように冷えた空気に突き刺すように、西日が差し込む。三階建ての旧建築は、キャンパスの喧噪を離れて、今日もひっそりと息を殺しているかのよう。

